

第1章	日本のブリキ玩具の歴史（明治・大正・昭和）	007
第1節	ブリキ玩具の誕生	008
	技術的な基盤と知的伝統／分業体制と大量生産／プレス技法の導入／ブリキ印刷の導入	
	陸蒸気／馬車／人と動物	
第2節	ブリキ玩具産業の発展	024
	世相を映すブリキ玩具／技術の向上と成熟期／セルロイドの併用／戦争の時代とブリキ玩具の製造禁止	
	軍艦／兵士／動物（明治・大正）／遊園地1／市電と花電車／明治期の自動車／昔話や伝統的モチーフ／ごっこ遊び／航空機／東京駅／電車、汽車／遊園地2／自動車、オートバイ／船舶／航空機／戦争／セルロイド併用のおもちゃ／ドラミング玩具／アクロバティック玩具／動物（昭和戦前）／生活用品／駄玩具／ブリキ玩具の代用品	
第3節	戦後のブリキ玩具	080
	ジープが幕を開ける——戦後ブリキ玩具第1号／終戦直後のおもちゃ作り／占領下のブリキ玩具／朝鮮戦争の影響による輸出高の増加	
	ジープ／オキュバイド・ジャパン時代のおもちゃ／戦争玩具／黄金時代のおもちゃ	
第4節	ブリキ玩具の黄金時代	092
	フリクション玩具／輸出品としてのブリキ玩具／電動玩具の出現／リモコン、ラジコン、ソニコン	
	モータリゼーションと自動車／1950年代の自動車／バラエティに富む自動車／1960年代の自動車	
第5節	自動車・乗り物玩具の隆盛	104
	輸玩具と国内向け玩具／街のヘリコプター ダイハツミゼット／はたらく車／鉄道、飛行機、船	
	街のヘリコプター ダイハツミゼット／ダイハツ／トヨペット・クラウン／トヨペット・コロナ／日産自動車／日産・セドリック／プリンス自動車／コニー（愛知機械工業）／マツダ（東洋工業）／マツダ（商用車）／三菱自動車／スバル（富士重工業）／オリエント（三井精機工業）／いすゞ自動車／日野自動車／ホンダ（本田技研工業）／東急くろがね工業／トヨエース／国産トラック／消防車／パトカー／ボンネット・バス／リアエンジン・バスほか／オールド・カー／トレラー／キャンピングカー、特殊車／レースカー／オートバイ／スクーター／船舶／航空機／鉄道	
第6節	子供の生活と遊び	158
	ブリキ玩具の定番「ブリキの金魚」／さまざまな小物玩具——線香鉄砲、百連発、数字合せ	
	小物玩具（駄玩具）／パチパチ／ガリガリ／笛／サーカス／クマの人形／イヌとネコ／動物・昆虫／スポーツ、アクティビティ／ボニーテール／ウエスタン／遊園地、レジャー／生活用品／独楽／貯金箱	
第7節	SF、宇宙もの	190
	ロケット／スペース・エクスプローラー／スペース・カー／宇宙船／宇宙関連のおもちゃ／ロケット基地／宇宙ステーション・円盤／アポロ／スペース・ガン／宇宙飛行士／ロボット／ロボット 初期すり足歩行／ロビータイプ／ロボット各種／箱型ロボット／変わり型のロボット／堀川玩具のロボット／キャラクター化されたSFもの	

第8節	キャラクター玩具	227
	ディズニー・キャラクター／アメリカン・キャラクター／日本のキャラクター／鉄人28号／鉄腕アトム／キャラクター歩行玩具／ウルトラマンシリーズ／将軍シリーズ／アニメ・キャラクター／怪獣・恐竜	
第9節	ブリキ玩具と私の半生	242
	おもちゃへの目覚め／ブリキ玩具の発掘と商い——「あしたの箱」の開店／コレクターたちとの交流／専門店との交流／宝島の発見／コレクションと商いの狭間で／『ブリキのおもちゃ』の出版／1980年代はコレクションの時代／トイショウのはじまり／ブリキ玩具の展示会／名古屋のコレクターたちとの思い出／ブリキ玩具関連図書の出版／復刻への手がかり	
第2章	ブリキ玩具の復活（1988～2017年）	250
	ブリキ玩具の復刻／復刻「鉄人28号 No.1」／復活玩具の隆盛／復活玩具時代の終焉	
第3章	ブリキ玩具の製造	254
	1 プロトタイプの製作／2 金型、メーター板、サンプル試作／3 ブリキ印刷の本番刷り／4 プレス工程／5 ゼンマイ／6 組み立て／7 検査・箱詰め	
第4章	日本のブリキ玩具の特徴	266
	ブリキ玩具を楽しむ——デザインとギミック／ブリキ玩具を支えた下請けの技術	
コラム		
	時計鳥 009 ガラガラ 014 コレクションアイテムとしての「ロボット」と「宇宙もの」224	
	ヤットコの話 259 製造に関わった方々 260 おもちゃデザイナー串田恭男の仕事 262	
	ブリキ玩具の手入れ法 268 主な購入先 269 ブリキ玩具アート作家の紹介 270	
	プレス機の保存 271	
凡例		006
メーカーマーク集		274
用語集		279
参考文献		283
あとがき		286

第1節

ブリキ玩具の誕生

ブリキは薄い鉄板を錫でメッキ加工したもので、日本語の「ブリキ」はオランダ語の「blik（薄い鉄板）」に由来する。ブリキは14世紀頃にボヘミアで発明され、日本には江戸時代にもたらされた。

いわゆるブリキ玩具が世に現れたのは1870年ごろとみられる。ヨーロッパやアメリカの市場に、ブリキを素材とする機械仕掛けの玩具が出まわりはじめた。鉄の薄板が発明され、その加工技術が機械化されたことで、多くの日用品にブリキが使われるようになり、玩具にも使われるようになった。ブリキに単純なプレス加工を施したものから、馬車や列車のようにゼンマイなどの機構を組み込んだものまで、多種多様な玩具が作られた。そのうちの一部が日本にも輸入され、やがて日本でも独自にブリキ玩具が作られるようになった。

技術的な基盤と知的伝統

日本におけるブリキ玩具作りは明治初期に始まった。当時、国内にはブリキ板を加工するプレス機もプレス技術もなく、ましてやブリキ印刷の技術はなく、すべて手作業であった。ただ、日本には手仕事にすぐれた職人たちがいた。

金属の灯籠やタンスの鋳金具などを作る鋳職人、鍋釜を修理する鋳掛屋の職人にしてみれば、薄板をハサミで手切りし、それを槌で叩いてふくらみをつけるくらいことは造作もなかった。また、ひな人形の小道具にみられるように、銅板で日用品のミニチュアを作る伝統もあった。

実際、豊田屋（のちの倉持商店）の創始者・倉持長吉は、ある鋳掛屋がジョウロを作るのを見て、これをおもちゃとして売り出すことを思いつき、ブリキ玩具の商いを始めた（『日本金属玩具史』）。当初はブリキ板が高価であったため、銅板にハンダ（鉛と錫の合金）を付着させて銀色に仕上げているようである。

欧米の機械仕掛けのブリキ玩具が輸入されるようになると、日本の職人たちは持ち前の器用さと研究心でもって、見よう見まねで模倣品を作るようになった。注目すべきは、造形だけでなく、ゼンマイなどの機構についても遜色なく模倣している点である。これは日本に「からくり」の伝統があったことが大きく影響していると思われる。

江戸時代初期、17世紀中ごろには大坂で「からくり人形」を使った芝居が行われており、同じころ、尾張地方には「からくり人形」を載せた山車もあった。こうした「からくり」の知識は特殊なものであったが、秘中の秘というわけでもなかった。たとえば、江戸時代の半ばに細川頼直（半蔵）が著した『機巧図彙』（1796年）には、和時計の構造や「茶運び人形」などの機構がきわめて正確に記述されている。「からくり」は日常的なものではなかったにせよ、その知識はある程度は共有されていたといえよう。そして、こうした技術や知識が、ブリキ玩具作りに活かされたことは想像に難くない。

分業体制と大量生産

また、江戸時代の社会システムや文化が、ブリキ玩具の製作に影響を与えたという見方もできる。京、大坂、江戸では町人文化が花開き、欧米に勝るとも劣らぬ文化的な基盤が形成され、学術や芸術、あるいは演劇がさかんに行われた。浮世絵はその最たるもので、いろいろな方面に影響を与えたが、ブリキ玩具との関わりで言えば、その分業体制はブリキ玩具の製作に似ている。

浮世絵の作者は一般には絵師であるが、絵師だけでは浮世絵は成立しない。絵師、彫師、摺師、版元からなる分業体制があって、初めて浮世絵の大量生産が可能になる。ブリキ玩具の製作もまた分業制で、大まかに言えば、原型製作、金型製作、プレス、印刷（初期には手彩色）、組み立ての工程を経て完成する。似たような分業体制は、人形や陶磁器、木工品などの分野でもあったはずで、ブリキ玩具に限らず、日本の近代化に寄与したといえよう。

先に述べたような技術的な基盤や知的伝統があ

時計鳥

明治初期のブリキ玩具のうち、特筆すべきものは「時計鳥」である。『東京玩具卸商同業組合史』（1935年）で「金属製ゴム応用、小鳥が飛

ぶ毎に針が進むもの」と説明され、『東京風俗志』（1899～1902年刊）にも松本洗耳によるイラストが載っているほどであるから（17頁参照）、それなりに普及した玩具といえる。

写真を見ていただくとわかるように、時計鳥の部品数は少なく、時計というわりにはゼンマイや歯車の類もない。が、これがなかなか面白い動きをする。構造を詳しく見てみよう。

まずは表の部分。時計部分は缶詰のような筐体と文字盤、時計の針（秒針）で構成されている。筐体の上部には芯棒があり、張子の小鳥と鈴がつながれている。

次は裏側（実物にはふたがある）。青いゴム紐（当時はまだ輪ゴムがなく、ゴム紐を輪にしたものが使われた）の向こうに見える黄色いボール紙の円盤（図解イ）は、写真では文字盤に密着しているように見えるがそうではない。円盤の中心部分のみが秒針とつながっていて、円盤と秒針の動きが連動するようになっている。筐体の上下にはゴム紐を引っかける金具があり（図解二、ホ）、下側の金具はクランクになっている。このゴム紐は垂直に伸びているように見えるが、円盤側に傾けて取り付けられており、円盤の上側にのみゴム紐が接している（図解側面図を参照）。

この状態でクランクをくるくるとまわすと、ゴム紐が均等にねじれる。ゴム紐をある程度巻いたところでクランクを放すと、ゴム紐の復元力によって、芯棒につながれた小鳥と鈴が回りだす。小

鳥は時計の上を一定の方向に回るが、紐にぶら下がった鈴は変則的な動きをする。鈴を結わえた紐が、芯棒の左右の棒（図解リ）の一方に絡みつくのである。

この紐は片方の棒に数回巻き付くと、やがて慣性によりほどける。ほどけた紐は、今度は反対側の棒に巻き付く。ここでも数回巻き付いたのち、逆回転して紐がほどける。紐は最初の棒に戻り、同じように巻き付く。こうしてゴム紐の力がなくなるまで、鈴は左右の棒のあいだを往復するのである。もちろん鈴は回転するたびに音を鳴らす。

一方、ボール紙の円盤はゴム紐と接しているため、ゴム紐が復元力によってねじれを戻すにつれ、円盤が少しずつ動く。円盤は秒針とくっついているから、秒針も円盤と同様に少しずつ動き、時を刻んでいるように見えるというわけである。

ゴム動力を用いる単純な仕組みだが、小鳥と鈴と時計の針が同時に動く様子は見ていて楽しく、初期のブリキ玩具の傑作といえよう。



01 時計鳥
BIRD AND CLOCK
(Hand-Painted)/
Rubber/ 1870s/
Unknown/ 105W
x 137H



10

10 ルーレット

盤上には数字の代わりに6種の錦絵が描かれている。赤と金を基調にした賑やかな配色で「がいせん万歳」と書かれ、日露戦争の戦勝に沸いた当時の雰囲気を感じられる。

10: ROULETTE/ 1910s/ Unknown/ 1910s/ 135φ x 80H



11

11 アヒルに乗る子供

ブリキ玩具は明治時代中期から盛んに輸出されるようになり、西洋人向けの意匠のものもあった。これはイギリスの童話「親指トム」を模したものであろうか。

11: CHILD ON THE DUCK/ 1920s/ Unknown/ 85L x 30W x 80H



12

12 キネマ

右側についているクランクをまわすと、箱の種絵がバラバラと変わる。

12: CINEMA BOX/ 1920s/ Unknown/ 75W x 130D x 140H



13

13 コマ

各国の国旗をモチーフにしたコマ。

13: SPINNING TOP/ 1910s/ Unknown/ 25φ (the three on the left), 30φ (the far right)



14

14 トンボ

竹とんぼのように角度をつけたプロペラ様のブリキ板を、螺旋状に捻った平棒に取り付けて、パイプを上下するとプロペラが回転して飛ぶ。プロペラは航空機を模したデザインになっている。

14: PROPELLER SKIP/ 1920s/ Unknown/ 100L x 20D



15

15 だるま

ダルマの底にあるボタンを押すと、舌と両手が飛び出す。「神戸人形」に通じるものがある。

15: DARUMA/ 1920s/ Unknown/ 80H



16

16 ポストの貯金箱

古い世代にはおなじみの赤い円筒型の郵便ポストは1901(明治34)年に登場した。投函口をコイン投入口にした貯金箱で、貯めたお金は下部の扉から取り出せる。

16: POST BANK/ 1910s/ Unknown/ 155H (the far right)



06 マシンガン(機関銃)

MADE IN OCCUPIED JAPANの表示は、おもちゃ本体への印刷・刻印のほか、この写真のようにシールやスタンプで施されているものもある。このおもちゃは戦前の金型を使用している。

06 : MACHINE GUN/ 1950s (Occupied Japan)/ Modern Toys/ 130L x 40W x 85H



09 レーシング・カー

消えかかっているが、ゴム印表示のMADE IN OCCUPIED JAPAN。
09 : RACING CAR 7/ Wind-up/ 1950s (Occupied Japan)/ Unknown/ 120L x 70W x 60H



10 オートバイ

こちらは、底面にMADE IN OCCUPIED JAPANが刻印されている。

10 : AUTO CYCLE/ Friction/ 1950s (Occupied Japan)/ TN: Nomura Toy/ 180L x 70H



07 シー・ボーイ(海の少年)

オールを動かして水上を前進する。
07 : SEA BOY/ Wind-up/ 1950s (Occupied Japan)/ TN: Nomura Toy/ 115L x 110H



08 金魚

尾びれにプリントによるオキユバイドの表記がある。

08 : GOLDFISH/ 1950s (Occupied Japan)/ Unknown/ 110L x 70W



11 クマの幸福時代

オキユバイド・ジャパン時代はセルロイドを併用したおもちゃが多かった。輸出されたおもちゃの多くは、このクマのおもちゃのように手のひらに載るほどの小さなものであった。

11 : BEAR'S HAPPY LIFE/ Wind-up/ 1950s (Occupied Japan)/ CK: Kuramochi/ 70W x 80D x 110H



12 シボレー

底面にゼンマイのつまみがある。後ろのレバーで前進後退を切り替えられる。

12 : CHEVROLET/ Wind-up/ 1950s (Occupied Japan)/ SKK/ 115L



13 ニュース・ボーイ

右手のベルを振りながら、左手の号外を上下に動かす。

13 : NEWS BOY/ Wind-up/ 1950s (Occupied Japan)/ TN: Nomura Toy/ Nikko Toy/ 100W x 60D x 150H



14 スキーヤー

14 : SKIER/ Wind-up/ 1950s (Occupied Japan)/ Unknown/ 160L x 40W x 120H

15 カウボーイ・ジープ

歯が半分だけの傘歯車と2つのカナの働きにより、前進と後退をくりかえす。走行方向の変換時、車体は思わぬ方向に進み、カウボーイがロデオをしているように前後に揺さぶられる。

15 : COWBOY JEEP/ Wind-up/ 1950s (Occupied Japan)/ ETCO/ 110L x 140H



16 ラクダ

足を動かして前に進む。手彩色仕上げ。ラクダの体に直接布帛(ボア生地)などを貼ったものもある。

16 : CAMEL/ Wind-up/ 1950s (Occupied Japan)/ Unknown/ 115H

消防車 FIRE ENGINE

消防車はブリキ玩具の花形であった。はしご車はもとより、輸出用ではファイアーチーフカー、タンク車など、多種多様のものが作られた。なかにはタンクに水を入れて放水できるものや、はしごが自動で伸びてゆくもの、消防士が旗を振りながら走るものもあり、バラエティに富む。赤い車はいつの時代も子供たちに大人気で、コレクターの評価も高い。

01 消防車

01 : FIRE CAR/ Friction/ 1950s/ 55S/
250L x 70W x 110H



01

02 消防車

02 : FIRE CAR/ Friction/ 1960s/
Yonezawa/ 400L x 140W x 180H



02

03 消防車

03 : FIRE ENGINE/ Friction/ 1950s/
Unknown/ 195L x 70W x 80H



03

04 消防車

04 : FIRE CAR/ Friction/ 1950s/ KO: Yoshiya/
420L x 120W x 170H



04

05 消防車(日産・ジュニア)

05 : NISSAN JUNIOR FIRE CAR/ Friction/ 1958/
Yonezawa/ 335L x 110W x 120H



05



06

06 タンク車

06 : FIRE ENGINE C. F. B./ Friction/ 1950s/
Unknown/ 130L x 50W x 60H



07

07 動物消防車

07 : FIRE ENGINE ANIMAL 1952/ Friction/ 1950s/
H/ 130L x 50W x 75H



08



09

08 はしご消防車

08 : FIRE CAR/ Friction/ 1950s/ Usagiya/ 135L x
50W x 75H

09 ジープ型はしご消防車

09 : LADDER FIRE ENGINE/ Friction/ 1950s/
Kaname/ 190L x 60W x 70H



10

10 はしご消防車

10 : FIRE ENGINE/ Friction/ 1950s/ Kato/ 225L x
70W x 90H



11

11 はしご消防車

11 : GOLDEN TOY FIRE CAR/ Friction/ 1958/
TN: Nomura Toy/ 270L x 9W5 x 110H

レースカー Race Carr

1950年代には葉巻型のレースカーが全盛で、これをモデルとしたおもちゃが日本でも大量に生産され、アメリカに輸出された。なかでもインディアナポリスで開催されるインディ 500のレースカーは当時のレースカーの代表格で、さまざまな意匠が凝らされた。

01 レースカー・アトム

01 : RACE CAR ATOM/ Friction/ 1950s/
Yonezawa/ 405L x 160W x 165H



01

02 レースカー・ジェット

02 : RACE CAR JET/ Friction/ 1950s/ TN: Nomura
Toy/ 190L x 95W x 90H



02

03 レースカー・ジェット

03 : RACE CAR JET/ Friction/ 1950s/ TN: Nomura
Toy/ 195L x 95W x 80H



03



04

04 レースカー・アトム

04 : RACE CAR ATOM/ Friction/ 1950s/ SAN;
Kosuge/ 210L x 110W x 80H



06



07

05 レースカー・ファイヤーバード

05 : RACE CAR FIREBIRD/ Friction/ 1950s/
Unknown/ 165L x 80W x 65H

06 レースカー・ベア

06 : RACE CAR BEAR/ 1950s/ Unknown/ 100L

07 ベイビー・レーサー

07 : BABY RACER/ Friction/ 1950s/ Alps/ 100L x
60W x 40H

09 ベンツ・レースカー

09 : BENZ RACE CAR/ BO/ UM1 x 2/ 1960s/ Alps/
300L x 145W x 90H

10 アストロ・レースカー

10 : ASTRO RACE CAR/ BO/ UM1 x 2/ 1950s/
Daiya/ 305L x 140W x 75H

11 レースカー・レッド・フラッシュ

11 : RACE CAR RED-FLASH/ Friction/ 1950s/
ETCO/ 210L x 100W x 65H

12 ミゼット・レーサー

12 : MIGET RACER/ Friction/ 1950s/ Yonezawa/
175L x 85W x 85H



09



11



13

13 レースカー・スペシャル

エンジンの動きが見えるようになっている。
13 : RACE CAR SPECIAL/ Friction/ 1950s/ TN: Nomura Toy/ 195L x 100W x 80H

14 レースカー・ワールド・キング

14 : RACE CAR WORLD KING/ Friction/ 1950s/ Bandai/ 125L x 75W x 40H

15 トライサイクルカー

15 : TRICYCLE RACE CAR/ Friction/ 1950s/ Modern Toys/ 210L x 90W x 60H



08

08 エレクトロ・スペシャル

08 : ELECTRO SPECIAL/ BO/ UM1 x 1/
1960s/ ETCO/ 250L x 120W x 120H



10



12



14



15

小物玩具（駄玩具） Penny Toys

小物玩具と一口に言っても、簡単なプレスだけを施したものから、単純なバネ仕掛けのもの、ちょっとしたギミックを内蔵するものまで多様である。小さな子供向けのおもちゃであるため、写実性よりは楽しい雰囲気を表したおもちゃが多い。



01 望遠鏡

宇宙柄が夢を誘う。
01 : SPACE PILOT TELESCOPE/ 1950s/
Unknown/ 70L

02 ポンポン船

熱膨張率の異なる金属板を合わせるバイメタルを利用したおもちゃ。ボイラーをろうそくの火で温めると、バイメタルの働きでボイラーが膨らんでパイプから水が入ってくる。水が入るとボイラーが冷えて縮み、水をパイプから吹き出す。その力でボートが水上を進む。
02 : POP POP BOAT/ Steam/ 1950s/ Unknown/ 110L x 50W



03

03 亀山のチョン兵衛さん
（飛んだり跳ねたり）

もともとは竹製の郷土玩具で、その仕組みをブリキで再現したもの。竹製玩具では竹の反発力を利用し、仕掛けをトリモチなどの粘着剤で止めると、しばらくすると反発力で粘着が外れ跳び上がる。ブリキ玩具ではトリモチと、竹の代わりに鉄線のバネが使われている。
03 : JUMPPING TOY/ Spring/ 1956/
Unknown/ 50L x 25W



04

04 金魚のジョウロ

背中と尾ひれの間に金魚の子供、腹側にはカエルが描かれている。
04 : WATERING POT/ 1950s/ Unknown/ 159L

05 金魚のジョウロ

背中に子供が泳いでいる姿、尾ひれには水中の様子が描かれている。
05 : WATERING POT/ 1950s/ Unknown/ 120L x 80W x 50H



05



06 やじろ兵衛

06 : YAJIROBEI/ 1950s/ Unknown/ 220L

07 バッタ

腹部にゴム製の吸盤がある。吸盤を机に押し付けてしばらく待つと、吸引力が徐々に落ちてバタが跳ね上がる。
07 : GRASSHOPPER/ Spring/ 1950s/
Unknown/ 65L (Body)

08 ベティちゃんのガラガラ

パラマウント映画のアニメ・キャラクター「ベティ・ブープ」が描かれている。
08 : BABY RATTLE/ 1950s/ Unknown/
125H



08



09

09 福助太鼓打

サイフォンの原理を使って噴水の力で水車をまわし、クランク機構により太鼓を打たせる。夏になると、おもちゃ屋の店頭でこのおもちゃの実演販売が行われた。
09 : Fukusuke DRUMMER/ 1950s/ Imakita/ 90W x 95H



10

10 発火ピストル

ライター石が取り付けられており、トリガーを引くとライターのやすりが回転して火花を散らす。
10 : COWBOY GUN/ Friction/ 1950s/ SAN/ 85L



11

11 金魚の水鉄砲

金魚のピストル型の水鉄砲。ピストルと金魚という一見何の関係もない題材が、水鉄砲という要素で結びつけられた面白い例。
11 : WATER PISTOL/ 1950s/ Unknown/ 100L x 75W



10



11



12



13



14

10 フライイング・ソーサー Z-101
いわゆるUFOは未確認飛行物体で必ずしも円盤型ではないが、「空飛ぶ円盤」のおもちゃもさまざまなバリエーションが作られている。
10 : FLYING SAUCER Z-101/ Friction/
1950s/ Modern Toys/ 165L x 135W x 40H

12 フライイング・ソーサー X-3000
12 : FLYING SAUCER X-3000/ Friction/
1950s/ Modern Toys/ 165L x 135W x 65H

11 ロケット・カー X
11 : ROCKET CAR X/ Friction/ 1950s/
Modern Toys/ 150L x 70W x 55H

13 ロケット・スペース・シップ
13 : ROCKET SPACE SHIP/ Friction/
1950s/ Kokyu/ 95L x 60W x 40H

14 アトミック X-8
14 : ATOMIC X-8/ Friction/ 1950s/
Mitsuhashi/ 145L x 85W x 60H



15



16

15 サテライト・フリート(衛星船団)
15 : SATELLITE FLEET/ Wind-up/ 1960/ TPS/
315L x 85W x 90H

16 A-1カー・スペース・パトロール
16 : A-1 CAR SPACE PATROL/ BO/ UM1x2/
1960s/ A1: Asakusa/ 300L x 250W x 90H

宇宙関連のおもちゃ Other Space Toy

宇宙関連のおもちゃは、主として製作コストの都合から、既存の金型を流用したもの、同じ金型でプリント違い、あるいは部品を付け加えたものが多く、結果的にバリエーションに富んでいた。

01 “フロリダ”エア・ボート・レグルス
モーターボートを宇宙船に仕立てたおもちゃ。プロペラの風力で水上を走る。ボートのおもちゃは船底に脚を取り付けて自立するようにしたものが多い。
01 : “FLORIDA” AIR BOAT Regulus/ BO/ UM1x2/
1960s/ ATC/ 210L x 100W x 105H

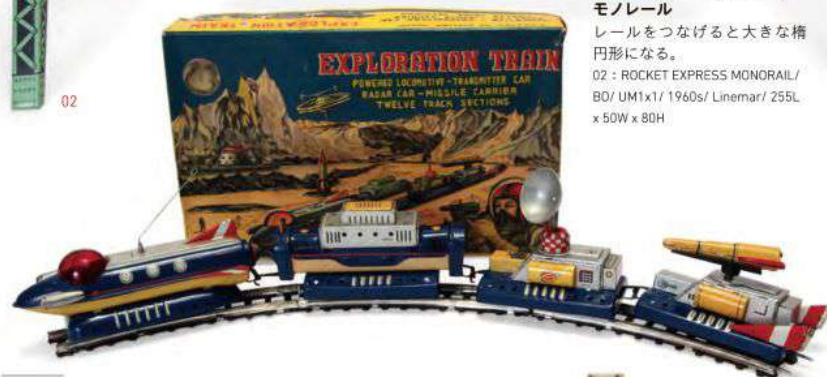


01



02

02 ロケット・エクスプレス・モノレール
レールをつなげると大きな楕円形になる。
02 : ROCKET EXPRESS MONORAIL/
BO/ UM1x1/ 1960s/ Linemar/ 255L
x 50W x 80H



03

03 エクスプロレーション・トレイン
鉄道玩具のスタイルを踏襲した探査鉄道。先頭車両はロケット型で、ほかは観測機器を積載している。
03 : EXPLORATION TRAIN/ BO/ UM2x2/ 1960s/ Sankei/ 540L x 55W

04 科学調査センター
アメリカの通信販売会社Searsの一連の宇宙ものは現実味を感じさせるコンセプトがあり、個性的なものが多い。ヘリポートをはじめ、観測機器らしきものを装備している。
04 : MOBILE SCIENTIFIC SURVEY CENTER/ BO/
UM1 x 2/ 1960s/ Sears/ 480L x 225W x 120D



04



15



16

15 宇宙飛行士

ロボットの目の部分を宇宙飛行士の顔に差し替えたもの。首からはロボットボディがそのまま使われている。

15 : ASTRONAUT/ BO/ UM1x2/ 1960s/ SH: Horikawa/ 290Hx140W

16 スペース・コマンダー

16 : SPACE COMMANDER/ BO/ UM1x2/ 1960s/ SH: Horikawa/ 255H



17



18



19

17 マーズ・エクスプローラー

目の部分の扉が開き、宇宙飛行士の顔が見えるようになっている。

17 : MARS EXPLORER/ BO/ UM1x2/ 1960s/ SH: Horikawa/ 245H

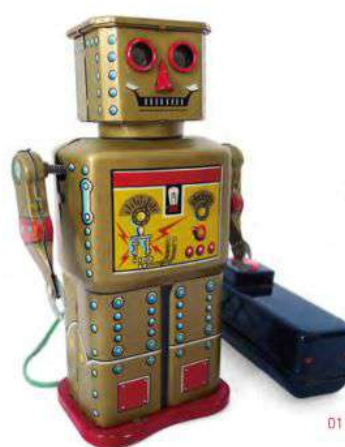
18 スペース・エクスプローラー

既存のロボットを流用した宇宙飛行士のおもちゃ。歩行停止時に機関銃が左右に動き、光りながら発射音をする(223頁08参照)。

18 : SPACE EXPLORER/ BO/ UM1x2/ 1960s/ SH: Horikawa/ 280Hx130W

19 スウィベル・オー・マティック・アストロノート

20 : SWIVEL-O-MATIC ASTRONAUT/ BO/ UM1x2/ 1960s/ SH: Horikawa/ 290H



01



02



03

01 ロボット

01 : ROBOT/ BO/ UM1x2/ RC/ 1950s/ Linemar/ 165H

ロボット Robot

ロボット玩具は、1950年代以降のブリキ玩具の花形のひとつである。世界にコレクターがおり、2000年代には海外オークションで1体に数百万円の値がついたこともある。1937年に日本で発売されたリリパット・ロボット(上段中央、67頁参照)がブリキ製ロボット玩具の第1号といわれている。



04 ロボット R-35

04 : ROBOT (R-35)/ BO/ UM1x2/ RC/ 1950s/ Linemar Toys/ 115W x 60D x 190H



05



05 アトミック・ロボット・マン

戦後すぐに発売されたロボット玩具。歩行の仕組みはリリパット・ロボットと同じ。

05 : ATOMIC ROBOT MAN/ Wind-up/ 1949 (Occupied Japan)/ Unknown/ 56W x 40D x 125H

変わり型のロボット Variant Robots

胸部のギアの回転によりアナログ計算機が稼働するもの、物を持ち上げて運ぶことができるもの、ボディ据え付けのテレビ画面に宇宙旅行の情景が映しだされるものなど、さまざまなアレンジが試みられた。



01 サンダー・ロボット

頭部のプロペラを回転させながら歩行する。停止すると両腕が前方に持ち上がり、目が点灯するとともに機関銃の発射音がけたたましく鳴る。

01: THUNDER ROBOT/ BO/ UM1 x 2/ 1968/ A1: Asakusa Toy/ 145W x 90D x 290H

02 ハイ・ホイール・ロボット

胸のギアを回転させながら歩行する。頭部とボディ内が点灯。このシリーズにはゼンマイ動力タイプもある。

02: HIGH WHEEL ROBOT/ BO/ UM1 x 2/ RC/ 1963/ KO: Yoshiya/ 85W x 70D x 225H



03 アンサー・ロボット

コンピューター計算機が出る前の機械式計算機のギミックを内蔵。胸部に答えの数字が表示される。歩行はしない。

03: ANSWER ROBOT/ BO/ UM1 x 2/ 1950s/ Ichida/ 370H



04 ホイール・A・ギア

ベルトで繋がれた赤・青・黄色のホイールがカチカチと音を立てて回転する。

04: WHEEL-A-GEAR/ BO/ UM1 x 2/ 1960s/ Taiyo/ 370H



05 TVスペース・マン

目が回転し、口が光る。胸部のテレビ画面には宇宙船が飛び交う情景が映し出される。アンテナの抜き差しでON OFFができる。

05: TV SPACE MAN/ BO/ UM1 x 2/ 1961/ Alps/ 370H



06 ムーン・エクスプローラー

目と額が光り、胸部の時計の針が回転する。ボディ下部のピストンも作動する。アンテナの抜き差しでON OFFができる。

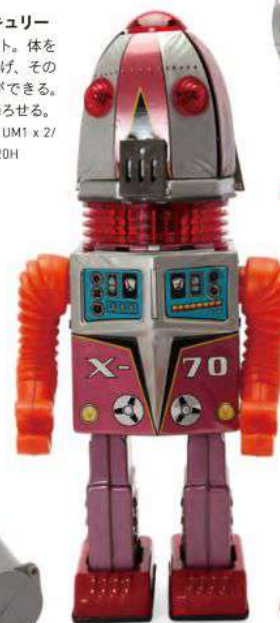
06: MOON EXPLORER/ BO/ UM1 x 2/ 1960s/ Bandai/ 430H (Incl. antenna)



07 ミスター・マーキュリー

リモコン操作のロボット。体をかがめて荷物を持ち上げ、そのまま歩行させることができる。荷物は任意の場所に降ろせる。

07: MR.MERCURY/ BO/ UM1 x 2/ RC/ 1961/ Yonezawa/ 320H



08 スペース・アイ X-70

別名チューリップヘッドと呼ばれる。パンパンと音を発しながら前進し、止まると頭部が開いてジージーと音がして頭部が回転する。内側のモニターには宇宙基地の絵が描かれ、ライトで点滅する。

08: SPACE ROBOT X-70/ BO/ UM2 x 2/ 1960s/ TN: Nomura Toy/ 320H



09 マイティ・ロボット

両腕を閉じたり開いたりしながら歩行する。

09: MIGHTY ROBOT/ Wind-up/ 1966/ Yonezawa/ 265H



10 ウィンキー・ロボット

胸部のメーターが動く。目がレイヤーカードによりウイंकするように見えることからこの名がある。

10: WINKY ROBOT/ Wind-up/ 1960/ Yonezawa/ 110W x 65D x 240H



11 スペース・エクスプローラー

頭部と両腕・両脚がボディに収納できるようにしており、各部収納時は箱型のテレビに変形する。

11: SPACE EXPLORER/ BO/ UM1 x 2/ 1960s/ Yonezawa/ 305H (open), 170H (closed)